

2012年度 リーディング・ユニバーシティ募金による
「21世紀社会のリーダー育成」助成金 活動報告書

2013年3月 法政大学 国際文化学部 堀上ゼミ

2012年度「21世紀社会のリーダー育成」助成金・活動総括

国際文化学部 教授 堀上英紀

【テーマ】

『学生による地域活性化活動とギネス世界記録』

【目的】

全国の過疎集落に関する国土交通省国土計画局の最近の報告書（資料-1）によれば、約62,222ある過疎集落のうち、今後10年以内に消滅又はいずれ消滅の可能性のある集落数は約2,600とされ過疎対策が求められている。ゼミ活動の一環として2003年度から毎夏期休暇中に各地で行っている援農活動で、地方の農村（福井県三国市、静岡県松崎町、山形県高畠町、群馬県富岡市など）ではどこも少子高齢化のため伝統的行事や日常生活に支障をきたしていることを肌で実感した。

昨年度、本学の「21世紀社会のリーダー育成」助成金を得て、取り組んでいる石川県羽咋市菅池地区（全戸数27）も、最初に訪れた2006年当時ほぼ「限界集落」に近い状況（高齢化率51.4%）にあった。幸い羽咋市役所と連携しながら取り組んだ活性化活動が功を奏し、この6年間で3組の30代の家族が移住し、数字の上からは「限界集落」から脱しつつある。

しかし、高齢者の移転や病気・体力の衰えなどにより生活基盤＝農業の維持が徐々に困難になり始めている。羽咋市では、昨年度『奇跡のリンゴ』で有名な弘前市の木村秋則氏を塾長に招いて、農業従事者を対象にした「自然栽培」に取り組み始めた（資料-2）。昨年6月「能登の里山・里海」が世界農業遺産（資料-3）に認定されたことを受けて始まったこの農法は、耕作放棄地を使い無農薬・無肥料・無除草剤で稲を育てるやり方で、実践田では、1反当たり6.5俵の収穫を上げた。

エコで、省エネ、低コスト、ヘルシーな「自然栽培」こそ、日本の農業の進むべきひとつの道を示していると思われるが、従来の農業従事者にはなかなか受け入れられないのが現状である。種々の機会を通じて「自然栽培」の良さをアピールして行きたい。

我々は引き続き羽咋市近隣および都会の若者たちと共同で菅池地区の活性化に繋がるイベントを催し、彼らに現地の良さをアピールしてもらい一人でも多くの移住者の増員に貢献したい。そのために、毎年冬期に菅池の棚田を利用して「巨大ひな壇」（資料-4）を作成し観客を呼ぶことで活性化に繋げているが、インターネットやギネス世界記録を見る限りこのような企画はどこも行っていないことが判明したので、今年度ゼミ生の方でギネス世界記録（資料-5）に申請することに決定した。

一方、石川県輪島市も少子高齢化が進み、近年伝統的夜祭りである「輪島大祭」（資料-6）のキリコ（奉燈）が担ぎ手不足で、何台かのキリコが出せない状況にある。ゼミでは2007年にユネスコの海外学生交流プログラムに採択されベトナムの三大学の学生達と能登半島の伝統的夏祭りを体験したことが縁となって、それ以来毎年輪島市の要請を受けキリコの組み立て作業、市内練り歩き、キリコの分解・収納まで3日間に亘って1台のキリコの担ぎ出しを支援している。その目的は、2007年3月の能登沖地震（マグニチュード6.9）以来観光客が激減した観光産業の輪島市を活性化させるため、伝統的祭りの支援に取り組んでいる。今年度もゼミ生以外に約20名の助っ人（都内の大学生、外国人留学生、

社会人など) 参加を呼びかけ、日本の伝統的祭りを通しての異文化体験や地域活性化への協力を依頼する。

以上の企画を通して、各学生が将来グローバルな視野に立った社会のリーダーとなるよう経験を積ませたい。

【計画】

■ 輪島大祭の活性化活動

5月末：輪島市役所より「輪島大祭」参加の要請届く。

6月：輪島市役所からの交通費補助金による新宿駅前⇄輪島市の往復チャーターバスの手配、民宿の手配、旅行傷害保険などについて、JTBと打ち合わせ。

石川県ほっと観光マイスターの藤平朝雄氏による「輪島大祭の歴史と伝統について」の参加者向け講演会を、現地到着後に行うための依頼・打ち合わせ。

7月：「輪島大祭」の参加者全員との事前打合せ会開催。

8月：「輪島大祭」参加(8/22~8/24)

9月：「輪島大祭」報告書の作成・製本および関係者への送付。

12月：国際文化学部・学会で成果報告。

3月：「21世紀リーダー育成助成による活動報告書」作成に取り組む。

■ 羽咋市菅池地区の地域活性化活動

5月：新聞、テレビなどのマスコミで我々の活動を知った羽咋市邑知長寿会(老人会、会費会員約420名)の猿田正平会長(資料-7)より、9月菅池でのゼミ合宿(稲刈り)の際に「食事を摂りながら若い人たちと話したい」との申し入れがあり、快諾した。長寿会の役員6名が、菅池会館にお出でになることが決まった。

6月：羽咋市役所、菅池町会、羽咋工業高校に合宿担当のゼミ生からコンタクトを取り、今秋の稲刈り合宿の際に準限界集落・菅池の活性化のためのイベント打ち合わせの段取りを行う。

9月：菅池での稲刈り合宿(約1週間)

地元の大学生などにも呼びかけ共同の援農作業をぜひ実現させる。

また、援農合宿中に翌年2月末に行われる「巨大ひな壇」制作の打ち合わせを各関係者で行う。

* 羽咋市邑知長寿会・役員との懇談会(於：菅池会館)

10月：国際文化学部で毎年開催される学会(研究発表会)に向けて、今年取り組んだ成果のまとめ作業を行う。

12月：国際文化学部・学会で成果報告。

2月：上旬に「巨大ひな壇」制作経験者による準備会議の開催。

中旬に「巨大ひな壇」制作参加者による初顔合わせ会兼事前打合せの開催。

下旬に、菅池の棚田を利用した「巨大ひな壇」制作の合宿(8泊9日)を行い、各関係者たちと共同で完成させる。

* ギネス世界記録員による記録確認作業(予定)

* 事前にポスター(資料-8)を作成し、市役所や「道の駅」、カフェなどに置かせて貰うと同時に、マスコミや市役所のホーム・ページでも宣伝してくれるよう依頼。

3月：「21世紀リーダー育成助成による活動報告書」作成に取り組む。

【活動内容】

1. 輪島市

・2012年の「輪島大祭」を企画するに当たり、本学および他大学の参加者を通じて知

り合いの留学生の募集を試みた。その結果、最終的に女子留学生 2 名が参加 (資料-6) した。また、輪島市でのキリコに関する講演会については、電話による交渉の結果、“ほっと石川観光マイスター”の藤平朝雄氏に快諾して頂いた。

輪島市到着初日の講演後、輪島市東部の能登半島ツアーをして頂き、揚げ浜式製塩法など里海の利用保全についての知識を深めることが出来た。キリコ祭りは、8/23 の夜 6 時から始まり、翌日の午前 1 時まで星空の下で行われたが、体調を壊したり、怪我するものは皆無であった。後日参加者全員のキリコ祭りに対する反応 (資料-6) は大好評で、参加者が SNS で祭り情報を発信した結果、来年輪島大祭をぜひ見に行きたいとの反応があった。我々の参加の様子は北陸中日新聞 (資料-9) と FNN 石川テレビ (資料-10) にも取り上げられた。なお、輪島市役所へ提出した「報告書」では、輪島大祭を更に盛り上げるための提案も行った。

2. 羽咋市

- ・ 9 月 9 日～9 月 14 日まで行った菅池での稲刈り活動の結果、中山間地にある棚田では大型機械の導入が不向きなため手刈りする部分も多く高齢化の進んだ地域では農家さんの負担が小さくない (田圃の泥濘に埋り込んだコンバインを引き上げるなど) ことを実感した。我々の泊めていただいた 2 軒の農家さんでは、稲刈り→籾乾燥→籾摺り→玄米の袋詰めをお手伝いし、2 日間で 30 キロ詰めの米袋を 50 袋生産し農協へ小型トラックで搬送した。その活動も北陸中日新聞 (資料-11) で取り上げられた。

- ・ 堀上ゼミが羽咋市菅池で援農活動を行うことになったのは、2005 年 12 月に羽咋市役所農林水産課の高野誠鮮課長補佐と知り合ったことがキッカケである。高野誠鮮氏は、最近マスコミでスーパー公務員として取り上げられている方であり、羽咋市神子原地区 (菅池もその一部) で採れた米をローマ法王に献上された方*で、それ以後「神子原米」は当初通常の 4 倍の価格で販売される高級ブランド米となった。また、菅池を含む農家さんたちによる直売所「神子の里」を立ち上げ (2007.3.)、年間 1 億円の売り上げを得ているとのことである。

* 「ローマ法王に米を食べさせた男 過疎の村を救ったスーパー公務員は何をしたか？」高野誠鮮著 (講談社)

- ・ 2013 年 2 月 24 日～3 月 4 日まで、羽咋市菅池の棚田で恒例の「巨大ひな壇」制作を行った。今回は、ゼミ生以外の他学部性や他大生 (明治大学・早稲田大学など)、院生、卒業生などの総勢 21 名 (資料-12) が参加した。さらに高野誠鮮氏の講演に触発された社会人 (東京ガスグループ、NTT データ、IIM ヒューマンソリューションなど) も合計 6 名参加された (2 泊 3 日)。今年のテーマは神子原米に因み「おむすび」型の巨大ひな人形 2 体と 3 人官女を制作した (資料-13)。3/2 (土) は、朝から天気恵まれず雪が降ったり止んだり、観客の出足は昨年約半分であった。夜には、花火師さんによる打ち上げ花火を予定していたが、天候不良で翌日に順延せざるを得なかった。翌 3/3 (日) は午後から晴天となり大勢の観客来訪され、午後 7 時から花火を打ち上げた。お披露目 2 日間の観客数は延べ 1,000 名強 (初日 363 名、2 日目 658 名、ゼミ生調べ) に達した。記帳台を設け感想を自由に書いて頂いた結果、羽咋市内の方よりも輪島市や小松市、富山市など遠方の方にリピーター (毎年来られている方が複数あり) が多いことも分かった。また、近隣自治体の地域興し関係者から、菅池での学生による「巨大ひな壇」が 7 年間継続していることに驚かれ、その理由について質問を受けた。法政大学、菅池町会 (民泊：1 泊 3 食付き 500 円)、羽咋市役所の援助がなければ不可能であることを伝えた。「巨大ひな壇」の様子は、新聞 (資料-14) やケーブルテレビなどで取り上げられた。

【今後の展望】

・2007年から毎年輪島大祭に参加してきたが、観光客の増加を望むのであれば、第一に家族連れ対策が必要と思われる。祭りのクライマックス、松明神事が午後11時過ぎではほとんどの家族連れは宿に帰ってしまうと考えられる。観光客が祭りのクライマックスを知らないのでは、祭りの感動が半減するので、観光客向けにホテルや宿では、例えばケーブルテレビなどで室内にいて祭りを鑑賞できるようにするとよいのではないだろうか。アンケートなどで一度観光客の意見を聞いた方がよいだろう。そのような作業なら参加学生たちにも十分可能と思われる。またキリコ巡航中に観光客の中に外国人をしばしば目にした。将来は、韓国や中国などからも多くの外国人がやって来る機会が増えると予想されるので、外国人向けのパンフレットが必要と思われる。

・我が国の食糧自給率は先進国の中で最低（カロリーベースで40%）であるため外国からの輸入に頼らざるを得ない中で、食の安心・安全が一層求められている。農業従事者の高齢化を考慮すると、無肥料・無農薬・無殺虫剤の「自然栽培法」は将来の農業の進む道を示していると思われる。しかし、昨年11月6日に羽咋市で第1回全国自然栽培フェアが開催されたが、集まったプロの農業者はいずれも若手の40代が主であった。

一方、現在栽培している慣行田で翌年から自然栽培を行っても残留農薬などのためかえって収穫が落ちるとのことである。むしろ現耕作放棄地を活用する方がベターとのことである。これらから、今後は若者たちと一緒に耕作放棄地を使った自然栽培による米・野菜作りを始めていきたいと考えている。そして、その様なことを実現出来るリーダーを育てていきたい。

【成果】

「巨大ひな壇」の2日間のお披露目には、今年も県内だけでなく富山県などから延べ1,000名を超える人々が来訪。地域活性化イベントとして大きな成果を挙げることができた。初日の降雪がなければさらに増えたものと思われる。また、子ども連れの家族の中には、毎年楽しみに来訪される方々がおられることは、とても励みになった。

今回は棚田を利用した巨大ひな壇を「ギネス世界記録」に申請した（2012.9.28）が、無料の申請コースで申し込んだため、受理（2013.1.31）されるのに数ヶ月を要した。

一方、昨年11月に輪島市白米の千枚田がギネス世界記録に認定されたことを輪島市長・梶文秋氏からの年賀状（資料-15）で知り、輪島市役所の担当者に経緯を問い合わせた。その結果、輪島市の場合、有料コースを選択し、申請から2ヶ月で、ギネス世界記録に認定されたとのことであった。

また、我々の場合は、所謂「変わり雛」を作って家族連れに喜んでもらえる「ひな人形」を制作して来たが、ギネスから送られてきた「新ガイドライン」によれば、市販のおひな様をレプリカとして制作し衣装や髪型なども勝手に代えたのでは、ガイドライン違反になるとの返事であった（資料-16）。急遽、「変わり雛」として再申請するには時間がなく、やむを得ず今回は挑戦を見送らざるを得なかった。次年度、再申請することになったが、有料の申請を考慮する必要もありそうだ。

ゼミ生4年 飯野なつみ

大学3年次にゼミをきっかけに地方農村の地域活性化という取り組みに着手してからというもの、東京・府中や羽咋市での農業体験や、地方のお祭りでのキリコ担ぎ、また田舎の農家で民泊するなど都会で生まれ育った私にはどれも初めてとなる体験がほとんどでした。すでにきれいに切りそろえられ、整えられた均質な野菜を買いに行くことはあっても、それらが作られている行程を自分で体験したことはなく、自分の毎日の食を実は何も知らなかったとすら今では思います。

ゼミに入って最初に体験した農作業は府中市のある農家で、当時は稲の栽培やねぎなどの畑野菜を育てていました。最初は何も知らないの荷物運びや不揃いなものをよけるといった軽作業をさせていただいたのですが、はじめから驚くことの連続でした。一般の人たちの手元に農作物が届くまでには膨大な時間と手間がかかっていることをここで実体験することとなったのです。羽咋市菅池町での援農合宿では、5日間にわたって農家に民泊し稲刈りの手伝いをしていました。毎日食べている米ですが、田舎のお年寄りが丹精込めて作業している風景がそこにはありました。羽咋市と東京とは地理的に大きな違いがあり、中山間地というところに菅池町があります。美しい棚田がひろがる風景を見たときには、是非活性化活動を積極的に行きこの風景を守っていきたいと感じたのを覚えています。稲の手刈りやもみの乾燥、玄米の袋詰め作業等、学生でも辛い過酷な労働が夏場中ずっと続いていると思うと、地方農村の過疎化は農村だけの問題ではなく日本中の食に影響しているのだと肌で感じました。輪島大祭においても、都会では見られない日本の伝統的な夜祭りという誇れる文化があるのに、担ぎ手が足りないという理由で規模が縮小されてしまうのは非常にもったいないことだと思いました。グローバル社会で海外の文化が浸透し、外国文化が身近、かつ手軽に体験できるようになっています。その一方で、日本の伝統的なよさや文化が埋もれつつあるのです。特に地方では若者不足から継承者がおらず、素晴らしい技術や文化が途絶えてしまう。私はまだまだ知らない日本の美しさのごく一部を、この活性化活動を通して知ることができました。そして地方と都会という相互の文化的刺激による学びや知恵は地域活性化活動の醍醐味であると感じています。

2月下旬に「巨大ひな人形」制作合宿を行った際には、過去に参加経験のある他学部生等が尽力してくれました。ゼミ生だけでは絶対に成し得なかったことで、またこうした活動に興味のある学生や社会人が毎年新しく参加して輪が広がっていくのを目の当たりにした時には大きなやりがいを感じました。また夏期援農合宿やひな壇合宿、輪島市活性化活動のいずれの活動においても、1

2012年度「21世紀リーダー育成」助成金 活動報告書(学生)

つのことに終始携わり責任を持ってやり遂げる達成感を味わえたことは学生時代の貴重な経験であったと思います。地域活性化活動に携わり気づかされたことの一つに、人のネットワークがさまざまところでリンクしているということがあります。今回も、法政の学生の友人や知人が多く手伝ってくれました。またそこから翌年のイベントにつながるケースもあります。人と人とのつながりが希薄な都会の文化ではなかなか気がつきにくいよさでもあります。せっかく学生時代に貴重な経験をしたので、自分から積極的に人とのつながりを築くことや、SNSなどを活用したイベント情報のシェアなどにより、相互の情報発信を絶やさないことが、私が今後持続できる地域活性化活動であると思います。この活動を通して学んだことを活かして地域社会のリーダーを目指すべく努力したいと思います。